
俺の周りは変と恋ばっか！

杏 代瑞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の周りは変と恋ばっか！

【NZコード】

N3069Y

【作者名】

杏 代瑞

【あらすじ】

口は悪いが平凡な高校生『水無月裕哉』は、常口頃から彼を取り巻く友人によつて振り回されていた。

そして、一部の人達にとつて待ちに待つた性転換者や異性装者を保護する法律『TGSV保護法』が施行され、最早歯止めの聞かなくなつた友人達の行動は更にエスカレート！

幼馴染の男の娘が、お嬢様だが異常趣味の少女が、イケメンだが淡淡的と裕哉を狙うゲイの友人が裕哉を取り合う！

果たして裕哉は無事高校を卒業することが出来るのか！？ 主要登

場人物は100%変人という変&恋愛コメディ作品（笑）
(話によつてはR-18に近い描写も出できます。苦手な方はご注
意ください)

完全なEKINUSHIKI作品です。変態？ 不定期更新？ だから
何？W

第1話『新生活の朝』

「うーん……」

近くで田覚ましの音が鳴つてゐる……とこつか田覚ましの音だ、止めなこと。

『起きないとふたりむかー。とか言ひてゐるが田覚ましとは違ひない、うん。』

つか、普通『起きないとぶつ殺すぞー。とかじやねえの？』『起きないとぶちこむぞー。』って何よ？

それはいいとして、せつねと止めるか……。

「そーれ、ほひつとな。つて、ンだよ。まだこんな時間じゃねえか
……」

今まで春休みのはずだからな。寝よ寝よ……。

と、俺は田覚ましを放り捨ててまた布団に潜り込もうとしたが、

『さつわと起きねえとテメエの菊 にぶち込むぞ！アーッ…』

「んな田覚ましがあるか！」アーッ…』

こきなり態度を豹変させた田覚ましに俺の熱い拳がヒット！
哀れにも田覚ましは爆碎、四散してしまった！

「あ……田覚まし壊しちまつた。びっすつかな」

まあ、ただ地面に落として電池が外れちまつただけなんだが。

今日はまだ春休み ずっと寝ていられる そんなに寝て大丈夫か
？ 大丈夫だ、問題ない

結論 このままでも問題なし。

「ンじゃ、おやすみーっと」

今度こそ布団に潜りいしたが、またしても俺の眠りを妨げるヤツの足音が。ソイツは俺の部屋の前に止まるとき、ノックを一回して部屋に入ってきた。

入つていいかくらい聞けよ……マナーがなつてないぞ。

「裕兄さんー？ 起きてるー？」

ソイツは女だった。というか、俺の知ってるヤツだった。
そりやそうだ。毎日顔を合わせてるからな。

「ニニニ……」

「裕兄さんー？ まだ寝てるかなー？ 寝てるなら起こすよー？」

さて、皆さん。ここで俺はどんな起こし方をされるでしょうか。甘~い展開を期待した人も多いと思いますが、コイツはそんなヤツじゃないのです。

「えーー！ 雪流ダイビングボーティプレスツー！」
「んぎやああああああああー！」

わざわざ助走をつけて俺の腹に飛び込んできた雪の手が、俺の敏感な場所にクリーンヒット！

ダイビングボディプレスに合わせてダイビングファイストをかましてくるとは……やるな、我が妹よ。

「起きた？ 裕兄さん」

「お、起きたが……息子に拳を落とすのはやめてくれ……」

「『めんねー。でも、こうでもしないと裕兄さん起きないでしょ？』

悪びれた様子もなく笑う我が妹。

「コイツは水無月雪。みなづき すずき俺こと水無月裕哉の妹で年は一つ下の16歳。兄の俺から言うのもなんだが、年頃だというのに「おてんば」を地で行くような娘だ。

可愛い妹ではあるが行動は破天荒そのもので、コイツを制御出来る人間は俺の知る限りではたった一人だけだ。

「て、トイ……なにヒトのズボンずり下げてやがる！？」「こり！-
てのひらでさするんじゃねえ！！」

「なにして……そのまだと痛いかなーと思つて。気持ちいいかな？」

「何ぬかしてやがる！？」

……訂正しよう。「おてんば」+「天然ボケボケ娘」だ、コイツは。

「やめんかい！-」

パンツに手を掛けようとしていた雪の手を無理矢理掴む。このまま「コイツの通りにさせてたらパンツまで脱がされてしまつわ！」

「えー」

何故か心底殘念そうな顔をする我が妹、雪。そんなに見たかったのか！？

「えー、じゃない！ ところで雪？ なんでまたこんな早い時間に起こしに来たんだ？ 今日はまだ春休みのはずだろ？」

雪の格好は学校行きの私服姿だった。

余談だが、俺達が通っている高校は正式な式典以外は私服OKだ。まったく、今日は休みだつてのに変なヤツだ。

と、思つていたのだが

「……え？」

「え？」

「真似しないでよ……。勘違いしてゐみたいだけど、今日から新学期だよ？」

「なに？！」

急いでカレンダーを確かめると、確かに今日から新学期だった。
勘違いしてたのは俺のほうだつたようだ。

「だからね？ 裕兄さん、早く着替ないと朝ご飯抜きで学校行くはめになるよ？」

「おおう、それはいかん」

朝飯は一日の活動源だ。抜いたり今日は睡眠学習のフルコースをすることがちまつ。

今日は始業式なので授業はないのでは、とかそういうことは言つてはいけない。

俺は急いで着替えようとしたが、雪のヤツは立ち去りつゝもしないで手をわきわきさせていた。

「あのや、雪？ そこのこられると着替えられないんだが？」
「ん？ 着替え、手伝つてあげようかと思つて」
「いいからさつと出でていけえ！」
「せやー」

俺が怒鳴ったのにも関わらず、雪は嬉しそうに笑いながら階段を降りていった。

まあ、どうせ俺がなに言つたって聞きやしないし。
ちよつぱやで着替えて持ち物を確かめる。といつても今日は授業もないはずなんでカバンの中に入れるのは筆記用具とノート、それに鉄板くらいだろつ。

「よし、いくか！」

全ての確認を終えた俺は、階段を降りてリビングへと向かつた。

第2話『元ヤンなお母様』

「ヒヤツハー…… 朝飯だぜえ お！」お……」

景気付けに世紀末モヒカンの真似をした俺の額に何やら固いモノがヒツー。

床に落ちる前にキャッチしたそれは黄色いレモン。かじつてみたら当然酸っぱい。

良い子のみんなは真似しちゃいけません。輸入モノは発ガン性のある薬が塗つてあるらしいからな。

「こきなり何しやがる… お袋…！」

「ああ！？ アンタが悪いんでしようが。朝つけぱらからくだらない真似してんじゃないよ。せひ、せつねと朝ご飯食べな！」

言しながらもテキパキと朝食を並べてこく金髪のババア。ちなみに雪のヤツは既に半分食べ終わっていて、楽しそうに笑いながらこじりを見ている。

「いい年していつまでもパックキンにしてんじゃねーよ（ボソッ）」

「…………ほつ？ そんなに早く死にたいのかい？」

「…………いえ、私が悪ついぞいました。何卒この卑しい私めに朝餉をお恵み下せこまし」

即座に引き下がる俺。お袋の両手には使い込まれたメリケンサックがはめこまれていたからだ。

さすが元ヤンキー。迫力満点だぜ……。しかもタダのヤンキーじゃないからな……。

「よろしく。ほら、早く食べないと間に合わなくなるよ
「へいへい……」

適当に返事して雪の隣の椅子に座る。
この金髪の女性は水無月濤恵みなづき なみえ。苗字から分かる通り、俺と雪の母親だ。年齢は……言つたら間違いなくスマキされる……怖ええ人だし。

なにしろ若い頃は全国制覇を成し遂げた有名な暴走族『神風夜叉』のレディースの総長だつたらしい。そんじょそこらのヤンキーとはわけが違う。

今でも金髪だし、部屋には当時着てた特攻服やら武器やら置いてあるし、怒らせるとメリケンサックや特殊警棒の一撃が飛んでくる。防犯グッズとして売られてるようなパチモンじやねえから、これがまたとんでもなく痛えんだ……。

「やついえば、お袋。親父がいないようだが?」

「父ちゃんはやつをひと会社に行つたよ。何でもやるけどがあるんだと
れ」

「そか。まあいいや。いただきまーす」

親父の紹介なんか後でもいいか。それよりも今は朝飯だ。

今日の朝飯は、と……銀シャリに田玉焼きにみそ汁に沢庵に……
おおつ、納豆があるじゃねえか!

「裕兄さんは納豆大好きだもんねー」

「おつ! 納豆をフATTOROと書いてしまつへりこ好きだぜー!」

早速練つて飯に掛けてかつこむ。からしは入れない。納豆にはからしを入れない、それが俺の信条だ。

『 先日施行されたTGSV保護法。それから一日経つた街の様子を安田リポーターに伝えてもらいます。現地の安田さん?』

最近よく耳にするよつになつた言葉が聞こえてきて、俺達は思わずテレビの画面に目を向けた。

「あー、そういえば昨日施行されたんだったねえ。まあ、ノーマルなあたしらにとつては関係ないさね」

「そうだねー。あ、でもみさちゃんは喜んでるかも?」

「ああ、あの「はそうだろうねえ。そこんどこどうなんだい? 裕哉」

「おおむね、お袋達の予想通りだよ……」

まあ、これが施行されたところでアイツが何か変わるわけでもねぇしな。俺を常に振り回すような奴だし。

テレビの中では、リポーターが忙しそうに街の様子を伝えている。確かにそれっぽい奴らが増えた気がするが気になるほどでもない。

そもそも、2年前に同性愛（これは元から個人の自由だが）と同性婚は法的に認められている。そして今回施行された法律で残りの奴らが法的に認められたってだけの話だ。

俺はよく知らんので詳しくは言えないが、なんでもT S、T G、TVといった奴らのための法律らしい。性転換者や俺の周りにいるアイツらのような異性装者のためのものってことだ。

ただ、TVに関しては少し厳しくて「行為をするに当たつて出来る限り美化すること」になつていて。まつは、ビニールのおっさん

すね毛も剃らないままスカート履いたり、化粧をしないままひげボーボーでしたりするのはNGってことだ。当たり前のことだが、著しく公序良俗に反する格好もNG。パンツ一丁や水着で街中を闊歩するとか、まあ誰もやらんとは思うが。

ふと、盆の上の膳を見ると空だった。いつの間にか食べ終わっていたようだ。

「ふう、じつせさん！ お？ 雪はもう食べ終わったのか？」

「とっくに食べ終わって学校いったよ。アンタもそろそろあの『が迎えに来るんじゃないかい？』

「おお……もうそんな時間か」

テレビの画面の左上を見ると、確かにそんな時間だった。

このままじや納豆臭いんで念入りに歯磨きしてツラ洗つて、鉄板入りのカバンを持つて玄関先に出た途端、待つてましたと言わんばかりに玄関のチャイムが鳴った。

「はいはい、今開けますよっとー」

ガラガラッと引き戸を開けると

「おはよっ、ユウ一 早く学校い」 ってなに朝から頭抱えてんの？」

「お前の格好のせいに決まってんだろうが……」

「んん？ これ？ お気に入りなんだけど、どこか変だつたりする？」

？」

そこには『不思議の国のアリス』から抜け出したアリス……もとい、俺限定のトラブルメイカーが立っていた。

第3話『その娘、アリスにつき』

「んじゅ、いつてくるわー……」

「いつてらっしゃい。裕哉、朝っぱらから辛氣くさい顔してんじゅないよ！ みわちゃんも氣をつけていつとこでー！」

「はーい、おばさん！ いつてきまーすー！」

わざわざが関先まで出てきたお袋に見送られて「ニコ・ニ」と家を出る俺と、青色のリボンに水色のワンピースの上からフリル付きのエプロンドレスを着た、髪色以外はどうにからビーツ見てもアリスにしか見えない奴。

「コイツの名前は神無月美里。かんなつき みさと俺の悪友で親友で幼馴染。女みたいな名前だし今も女の格好をしてるが、コイツは女じゃない。いわゆる『男の娘』ってヤツだ。

まあ、実際美里は女顔つてか女にしか見えねえし可愛い奴なんだが、俺に対する行動はマジでハンパない。朝起きたらコイツが横で寝てたとか、そんなことも多々あつたりする。

ちなみに美里の家は俺の隣。ひそし伝にてお互の家を行き来出来る仲だ。

そんなこんなで俺限定のトラブルマイカーな奴ではあるが、根は悪い奴じゃないので好きにさせている。

「コウ、本当に辛氣くさい顔してるねー。そんなんじゃ幸せが逃げてくよー？」

「あー……半分はお前のせいだ、あと半分は氣分的な問題だ。ほつとけ」

「え？ やっぱ僕のせいなの？ これ、そんなに変かなあ……お気に入りなのに」

と残念そうに言つて、その場でクルリと一回転する美里。最後にポーズ決めて「キラッ」。

確かに可愛いけどさあ……そういう問題じゃねえんだつーの！

「いくら大っぴらに出来るつつつても、初田からそれはないんじゃねえか？」

「えー？ うちの学校私服登校オッケーだし、先生にもちゃんと許可取ったんだよ？」

マジで許可下りたんかい……。

うちの学校は元から公序良俗に反してなければ私服登校OKだったんだが、男装・女装したまま登校するのはNGだった。

が、例の法律が施行されてからは電話で「許可を取れば異性装してまま登校しても良い」という連絡があった。

いつも思うんだがうちの学校、校則甘すぎだろ……。

「つか、美里」

「ん？ なーに？」

「そんな格好で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない。まー、コウガ言いたいことを察して答えるけど、僕は似合つてると思ひし、見たい奴は勝手に見ればいいんだよ。それに」

「それに？」

「僕がこういうの好きだってのは、もつ学校中のみんなが知つてることだろ？」

「ああ、確かにな……」

思い出話になるが、あれは去年の夏くらいのことだ。

何故かは知らんが美里が女装、もう一人の奴が男装のまま学校に来て大騒ぎになつたことがあつた。

そのもう一人の奴は男装するような奴じゃなかつたんだが、俺の悪友その3によれば「何かで張り合つていたんじゃないでしょ？」という意味不明な理由からだつた。

結果、一人ともめでたく三日間の停学。この一件で美里の女装好きが全校生徒に知れ渡つてしまつたわけだが、コイツは全く気にしねえどころか、それすらも計画通りと言わんばかりに行動をエスカレートさせてきやがつた。さすがに女装したまま登校するのは、今まで一度としなかつたが他の面でだ。

「まあ、美里がそれでいいてんなら好きにしたらいいぞ」

「うんうん、僕は僕のしたいことをするだけだよ。えいっ！」

そう言つて美里は俺の腕に抱きついてくる。明るい栗色のミドルロングに少女のような顔立ち、華奢な体つき。何も知らない奴から見たらいちゃつく男と女にしか見えないんだろうな。

「ちょい重たいし、視線が鬱陶しいんだが？」

「えへへー、そんなの気にしない気にしない」

「はあ、もう好きにしろ。ところで美里……」

今聞くよつたことでもないとは思つが、ついでなんで聞いといつ。

「んー？」

美里が顔を上げる。シャンプーの匂いか、花の香りに混じつて甘い香りがする。

その甘い香りを嗅いだと意識が飛びそになるよつた……気の

せいだな、うん。

「もう一つの名前、なんつたつけな……」

「もしかして、『トランス・ネーム』のこと?」

「ああ、それだ。もう決めたのか?」

「うん、『アリス』にしたよ」

「さいですか……」

なんつーか、まんまじやねえか! ロイツらしき名前ではあるが、もう少し一捻りするとかなかつたのか!?

ちなみにトランス・ネームは例の法律の適用者専用のもう一つの名前のことだ。

別に法律で決めるようなものでもねえ気がすんだが、「対象者は行為をする時にのみトランス・ネームを名乗っても良い」ということらしい。美里の奴は「雰囲気作りのためだよ」とか言つてたつな。

そんなことを話してゐうちに大きめの交差点が見えてくる。美里が腕に抱きついてるから歩きこへいつたらねえんだが、それでも大分進んでたようだ。

と、俺のよく知つてこる姿の奴が左から歩いてくるのが見えた。

黒のゴシックっぽいロングのワンピースとこう変わった服装の女だ。

「お、あれは……おーい、睦月!」

ソイツは俺達の存在に気づくと慌てることなく横断歩道を渡つてから、こっちに向かってきて少しばかり古風な挨拶をする。

「あら、裕哉さん。いきばさんよつ むつ……」「むつ……」

が、まだ俺の腕に抱きついたままの美里を見た途端にソイツの目
が鋭くなつた。美里の目もいつの間にか鋭くなつてて、バチバチッ
という音が今にも聞こえてきそうだ。

そんな二人を見て、俺は心の中でこう言った。

アーメン。

第3話『その娘、アリスにつき』（後書き）

次回で一先ずの役者が揃います。

第4話『見た田お嬢様といケメンの優男』

おはよづ、諸君。水無月裕哉だ。

早速だが、いま俺の田の前で一人の少女（左方は『?』だが）が睨み合つてゐる。

今にも殴り合ひが始まりそうだが、この一人の場合喧嘩は喧嘩でも口喧嘩。なんで、俺も止める気はなかつたりする。

とりあえず、心の中で『オング』でも鳴らしておいつか。それ、カーンとな。

「あーら、美里さん。そんなに引っ付かれていては裕哉さんが歩きにくこのでは『ゼロ』ません」と…」

「どこのお嬢様を思わせる口調で美里を挑発する睦月。まあ、口イツだと違和感があんまねぇよな……正真正銘のお嬢様だし。

「睦月ちゃんもおはよう。相変わらず黒ずくめでいい感じも睦月ちゃんって感じだね！ それよりも、朝はまず挨拶から、じゃないのかなー？」

美里の反撃。つかの一人、一見すると仲が悪いように見えるんだが、なんか楽しそうにやつてる氣もすんだよなー。喧嘩するほどなんとやら～つて奴なんかね？

「それもそうですね。『きげんよづ、美里さん。ぐぬぬ……』
「むむむ……」

お約束だが、何が「むむむ」だつ！

人通りも多くなってきたしそろそろやめさせるべきか、と思った途端にケツに妙な手触りを感じる。横を振り向けば「バリバリ現役でホストやってます」と言わんばかりのイケメンが俺の隣に立っていた。

「やれやれ、君たちは相変わらずですね」

「雅矢……そう言いながらてめえはなにひとのケツ撫で回してやがる……！」

「おつと、これは失礼。ははは」

まつたく、コイツは……油断も隙もあつたもんじゃねえな。

この二人 ゴシック調のロングワンピに腰くらいまである黒髪ロングストレート女とサラサラ髪のイケメン男はそれぞれ九条院睦月、高橋雅矢。俺の悪友その2とその3だ。

睦月は名門『九条院財閥』のご令嬢。雅矢は普通の家の出らしいが見ての通りの日本人離れしたイケメン。だが、二人とも性格や性癖は多少（本人たちの名誉のためにこう言つとく）まともじやない。なんでかつてーと、睦月は蛙とかの解剖実験するたびに息が荒くなつたり、みんなで焼肉屋に行けば内臓ばっかり頬んだりする奴で雅矢は行動からも大体分かるよう所謂『ゲイ』の男。コイツに誰かが「アツー！」されたって話は聞かないが、本人もそう言つてる。まあ行動はアレだが、二人とも俺の大切な友人だ。

「おはようございます、裕哉君。神無月君と九条院さんも。そろそろ時間ですし、一旦切り上げて学校に行きませんか？」

雅矢がそういうと、美里と睦月は同時に小さく溜息をついていつもの顔に戻った。おお、さすが雅矢。この二人のトップバーナだけ

はあるぜー！

「ナリナリですわね。それでは、早く参りましょ'つか」

言いながら睦月はひつそりと俺の左手を握る。

なんかコイツの手って冷たいな……冷え性か何かなんかねえ？

「うんうん って！ なにちやつかりユウの手握ってるんだよ！」

「これくらい良いではありませんか。あなたは右腕、わたくしは左手。何か問題があります？」

「むむむーっ」

「何がむむむだ！ ほら、さつあと行くぞ」

これ以上ここにいたらループしちまうぞうだ。

「相変わらず賑やかですねえ。ははははは」

雅矢、お前も言いながら今度は腰を揉んでんじゃねえ！

学校までの直線道路をわいわいがやがやと歩く俺たち。右には美里、左には睦月。後ろにはイケメン雅矢と普通なら裸足で逃げ出しあくなるくらい目立つてる。

が、「悲しいんだけど、これって去年からなのよね」ってことでも嫌でも慣れてしまった自分がここにいる……。

「そういえば、裕哉さん」

俺を見た睦月の頬が何故か赤い……田も潤んできるような気がする。そんだけでなんか嫌な予感しかしないが、とりあえず聞いてみる」とこするか……。

「ん？ なんだ？」

「今朝、活きの良い蛙を捕まえましたのよ。早速、放課後にもう一人つきりで解剖してみません?」

「やられよ！ おい、さりげなくポケットからメスを取り出さんじゃねえ！」

「あら、じ心配には及びませんことよ。このメスはセツリック製で金属探知機にも引っ掛からない特注品ですの」

「そういう問題じゃねえよ！！」

「この女…… メスを見てうつとつしてやがる。あぶねえ！！」

「なんでしたら、裕哉さんの股間の鋭いメスでわたくしの母とを

「おーっとそこまでだ！ 朝っぱらからなにトチ狂つてやがる！ わざわざと行くぞオラ！」

「やうだよ陸用ちゃん！ そ、それにコウのはそんなメスみたいに細くないっ！」

「ほう？ 裕哉君のはそんなビッグマグナムなのですか。それは楽しみですね」

「ああー、なんかもう収集つかねえから引きてっても連れてくわー！」

「ああ、裕哉さん……。そんなに激しくされではわたくしはもう

「いいからお前はもう黙つてやがれっ！！」

「そんなこんなで学校に到着。なんかいつも以上に疲れた気がするわ……。

睦月の奴はまだトリップしたまま。ますます変なことを口に出しか

うだつたんで、美里のカバンに何故か入つてたガムテープで口を塞いでやつた。

またなんか変なことを考えてやがるに違ひねえ……恍惚してる睦月をそのままに、俺たちは今年度のクラス分けが発表されるのを待つた。

第4話『見た田お嬢様といケメンの優男』（後書き）

IJの物語はKENNZENものです

第5話『帰宅前も後も一騒動』

クラス分けの結果、俺たちは欠けることなく同じクラスになつた。その後始業式でテキトーにハゲ校長の無駄にクソ長い話を聞いて、今は放課後のHRの時間だ。

いくら変わった学校とはいえ、さすがに始業式から授業はやらない。ようするに『今日はこれで終わりだ。ヒヤツホーイ！！』ってことだ。ヒヤツホーイ！！

「よおし、諸君！ 今日はこれで全て終わりだ！ 諸君も三年生になつたわけだが、おれは諸君に厳しく勉強しろとは言わん！ 勉強して良い会社や大学を受けるも良し。遊んで過ごすのも良しだ！ では諸君、帰つて遊ぶがいい。フハハハハハハ！」

言いたいことだけ言って颯爽^{さっそう}と去つていく俺たちの担任。無駄にかつけえー。

「帝星先生は相変わらずだね」

俺の右隣の席の美里は帰り支度をしながら、今にも吹き出しそうなのをこらえている。

担任の名前は帝星刺鶴醒^{みかじほ}_{さつき}。去年もだつたが、今年もこの人が俺たちの担任だ。

すごい苗字と名前つーかどこぞの世紀末漫画に出てそうだが、思い切つて本人に聞いてみたところ「ん？ おれとサザーは無関係だぞ。尊敬してはいるがな。ワハハハハ！」って返事が返ってきた。

ハチヤメチヤな先生だが、豪快な行動振りと威厳たっぷりの言い

方が面白いのか、生徒の人気は常にストップ高だ。

「そうだな。せっかくの半ドンだし、帰りにどうか寄つてくれ？」

「うん。僕はいいけど、睦月ちゃんと高橋くんはどうするー？」

俺と美里が後ろを振り向くと、一人は帰り支度してた手を止めて俺たちを見た。余談だが俺の右隣が美里で後ろが睦月、右斜め後ろが雅矢の席だ。

あの先公め……今日は見事に四人固めてくれやがって。後でスープーボールぶつけたらあ！

「良いですわね。わたくしは構いませんわよ。御付き合い致しますわ」

「残念ですが、私はこれから用事があつて……」

睦月はオーケーで雅矢は用事ありか。四人でどつか行きたい気分だつたし、また今度にするか

「そつかー。用事なら仕方ないね。また今度にする？」

と思つてたら美里がそのまま言つてくれた。

「そうですわね。雅矢さんが大丈夫な時に致しましょ！」

「すみませんねえ。それでは私はこれで。さよなら畠さん、また

明日」

「おつ、また明日な！」

「げんよう、雅矢さん」

「またね～つ、高橋くん」

よつほど急いでるらしく、雅矢の奴は挨拶もそこそこに去つてい

つた。

そういうえば、アイツの家のことってあんま聞かねえな。何か事情があんのかねー？

「ンジヤ、帰んべー。……ん？」

カバンを持つて立ち上がると、また良からぬ」とを考えてそうな皿をした睦月が俺の右腕に抱きついてきた。

睦月よ……今度はお前か！

「んふふ。これで裕哉さんの右腕はわたくしのモノですわ」

おい、今なんか『モノ』の発音がおかしかったぞ！

「あーっ！ 睦月ちゃん！ セー！ は僕の特等席だよっ！！！」

「あー、そのよつな」と誰がお決めになつたんですの？ 早い者勝ちですわ

「むむむーっ！ じゃあ僕はこいつ！」

「ぐぬぬぬー」

「何がむむむだ！ てか、一年の時もだつたがお前らよく飽きねえな。ある意味感心するわ……」

突然口を挟んできたクラスメイト。「誰だけ？ 名前分かんねえから仮にモブ△としどう」「うん。

「ひでえ！ オレは吉岡だ！ 去年も同じクラスだつたもつが……」「そつだつたか？ まあどうでもいいや。おこお前らー、こつまで俺の腕に引っ付いてやがるー！？ セツセツと帰んぞー！？」

怒鳴つても離れそうになえから右腕に睦月、左腕に美里を引っ付

けたまま学校から出てやつた。大分目立つてしまつた気がするが今さらなことだ。

校門を過ぎてからまた睦月の奴がトリップし始めたんで、とりあえずカバンで殴つておいた。あ、そういうえばカバンに鉄板入れてたつけ。なんか睦月の頭から星が飛び出でた気がすんだが……まあ見た目に反して丈夫な奴だから問題ないだろ。

「ばいばい、ユウ。また明日ねーー！」

馬鹿話に花を咲かせてるうちに家についたので、家の前で美里と別れる。

「おう！　また　つて明日は休みだぞ？」
「あ、そうだった。ねえユウ、明日遊びにいつてもいい？」
「ああ、いいぞ。明日は俺も用事ねえしな」
「ありがとっ！　じゃあ、また明日ねーー！」

やけに嬉しそうにしながら、美里は自分の家に入つていった。いつものことだらうに……そんなに嬉しかつたのかねえ？
ま、いいや。俺も家に入らうーっと。

「TATATAただいまーーと　おわあっーー！」

引き戸を開けた途端に飛んでくる丸い物体！　間一髪よけて跳ね回つたそれを確認するとタダのスーパー・ボールだつた。

へえー懐かしいな。小坊くらいまではよく見たんだが最近はめつきり……つてそうじやねえ！！

「お袋！ わざわざ待ち構えて息子にスーパー・ボール投げるたあ
どうこう見だ！？」

「チツ。避けたのかい。つまんないねえ」

今「チツ」って言つたよこのババア！

「まあ、あれだ。お畳のワイヤードシヨーなんぞみるの、あたしに似合
わないだろ？ ちょっととした暇つぶしさね。それでお畳はどうする
んだい？」

「息子で遊ぶなよ……あんま腹減つてねえから昼飯はいいわ。ん…
…？」

脱いだ靴を靴箱にしまおうとして、見慣れたブーツを発見する。
これは……アイツが来てるのか？

「お袋。今穂の奴きてんのか？」

「ああ、こるよ。今は上で雪と遊んでんじゃないかい？」

どうやら、アイツが遊びにきてるのは間違いねえようだな。つか、
アイツ、H R サボつてきたのか？

……あの穂のことだし、十二分にあつえるのが怖えどこだ。

「……ん？」

2階に上がりて自分の部屋のドアを開けよつとした俺は、中に誰
かがいる気配を感じてドアノブから手を離した。

誰だ？ 雪と穂が上にいるなら雪の部屋にいるはずだし、もしか
してボウドロか！？

なんてな。隣の部屋にいるんなら、分からなればずもねえよな。

一人とも俺の部屋でなんかやつてんのか？

何か詰し声が聞こえてくるのでドアに耳をあてばだててみると

『あつ……お姉様つ……そりせ……』

『何イイ声上げてんだ? やつぱ口がイイんだろう?』

『は、はい……そこがつ、気持ちいいんです……っ!』

『へへ、やつぱりな。罰は口が弱いもんな。アタイも燃えてきた

サ

『あつ……んつ……お姉様あ……』

……えつ? なんぞこれえ……!

第6話『アタイが高橋薺だ!』

えーと、これは所謂アレですか？ ドアの向こう側では百合の花が咲き乱れてるってヤツ？

ちくしょう……なんていひやがつて叫ばれよ……

これは一度言つてしまはならんな。てなわけで五合目五合目一ノ入するぜ！ ハヤツハアー！！

「お前ひー。俺の部屋でなにやつて ズローッ！…」

部屋に入った途端に漫画のよつなお約束のバナナの皮でも踏んだ
ベッドの上で雪に薺がまたがつてゐる。ここまではそれっぽいんだ
が、奴らがやつてたのはタダのマッサージだった……どうせそんな
こつたうつとは思つてたよ！

「お、裕哉じやねえか。おひーー」
「裕兄わん。おかえりー」

奴らは俺の気持ちなんぞ知つたこいつやない様子で挨拶してくる。
はあ……なんか疲れたし、どうでもいいこいやと俺はテレビの画面に目
を向けてそのまま固まつた。

『ああん？ 最近だらしねえな？』

「……なあ、稜？」

俺、フリーズから復帰。

「おん？ なんだ裕哉？」

「別にマツサーバジする時にテレビやらビデオやらを見るなとは言わねえけどよ……なんで『ガチムチパンツレスリング』なんだよ！－！」

普通はリラックスをせるために『世界の景色』とか『N·i·c·e boat』とか流すもんだろ！？ いや、『N·i·c·e boat』は少し違うかもだけどさあ……さすがにこれはないわ。

「ンなモン面白いからに決まつてんだろうが。なあ、雪？」

「はい。でも、私はお姉様が良ければなんでも……」

「ハハハ、愛いヤツだ。あとでたつぱり可愛がつてやるからな

「えへへー、お姉様あ」

子猫のように甘える雪を笑いながら撫でる稜。

精神が汚染されそุดからてめえらの部屋でやれ。この、ある意味バカツプルがつ－！

「雪、お前もお前だ！ マツサーバジくらいでイヤラシイ声出してんじやねえ－！」

「だつて……お姉様、力が強いから気持ちよくて、つい……

「まあアタイは力には多少自信があるからな－ ハハハ！」

……そりやあ、毎日毎日あんなぶつとい鎖を振り回してたら嫌でも力が付くでしょう。それで毎度毎度犠牲になる俺はたまたま王

ンじゃないがな！

無駄にドヤ顔をしながら、レザーの上着のポケットから「タールもニコチンもヤバイ量です」と言わんばかりに『DEATH』と描かれた洋モクを取り出した女は高橋稜^{たかはしりん}。苗字から分かるかもしれませんが、俺の悪友である高橋雅矢の妹だ。

服装は上下レザー+鎖やらシルバーで常にジャラジャラさせてる。言葉遣いは聞いての通りの男言葉で、美里とは逆の『男装娘』だつたりする。

雪^{ゆき}とは見たままの仲だ。雪は稜を実の姉のように慕つていて、稜は雪を実の妹のように可愛がってる。時々行き過ぎてる気がしないでもないが、俺が口出すようなことでもねえしな。

余談だが、稜はあるバンドでギターを担当してたりもする。なんだつけな……そうだ、ヘヴィメタルとかデスメタルとかそんな感じのヤツ。

それはいいとして

「稜、前にも言つたが俺の部屋は禁煙だ
「チツ」

俺がライターを操作しようとしていた手を止めると、稜は舌打ちをしながらも素直に洋モクの箱をポケットに戻した。

俺は酒はやるが煙草はやらない。というか、煙草の臭いが苦手なんだ。よつて、俺の部屋も当然禁煙だ。

「一服してから行こうと思つてたんだが仕方ねえな。そんじゃ、アタイはそろそろ行くわ

「ん？ 今日はライブかなんがあるのか？」

「うんにゃ。ライブつーか、本番前の練習があんだよ。メンバー全員が集まつからサボるわけにもいかねーしな。じゃあなー！」

「それなら仕方ねえか。またなー！」

「お姉様、またー」

「ああ、雪。明日アタインち来いよ。わつきの続きしてやつから

「あつ……。はい、お姉様……」

最後にウイーンクを決めて蓑は部屋から出ていった。つか……本当にマツサージだつたんだよな？ それにしては雪の顔がゆでダコのようになつてゐるんだが……。

俺がそのことを雪に聞いてだと

「えつ……や、やだあー裕兄さんつたらあ　！！」

「ちょ、おま！ それに鉄板が入つて　あやああああああああああああああー！」

照れ隠しのあまりに暴走する雪に撲殺されかけました。これが俗に言つ『満身創痍』つて奴だな。マジで痛えわ……。

鉄板入りのカバンはすぐ危険みてだから、良い子のみんなはマネすんなよー！？

その日は午後の出来事以外は特に大したこともなく過ぎていった。

一つだけ言えば、風呂場行つたら親父がマツパでポージングして「ん？ 裕哉か。たまにやー一緒にに入るか？ ハツハツハー！」とか抜かしやがつたんで、とりあえず手加減なしで延髄斬りかまして浴槽に沈めてやつた。

日付が変わつた直後くらいに部屋に戻つて着替えて電気を消してベッドイン！ 今日はもつやることもねえし、わつと寝ちまおつ。

「ふああー、今日も疲れたぜ……おやすみー」

「おやすみー」

……どうからか声が聞こえてきた気がすんだが多分空耳だろう。
根拠はねえが、なんだか良い夢が見れそうだ。そう決め付けて俺
は毛布を被ると、すぐに眠りへと落ちていった。

第7話『THE 不法侵入』

「ん……」

寝起きのためか、耳元で聞こえるズズメの鳴き声と、瞼ごしに感じる口差しに俺は目を覚ました。

結構疲れてたらしく、ぐつすりと眠れたようだ。良い夢は見れなかつたが、これはこれでいいことだ。

「今、何時だ……？」

机の上に置いてある田覚まし時計（今度はまともなヤツ）で時間を確認するために首と顔を左に向けると

「すうすう……」

「……なんでお前が隣で寝てやがる？」

いつの間にきてやがったのか、美里の奴が幸せそつなツラしながら寝息を立てていた。

そういうや、寝る前に誰かの声が聞こえた気がしたつけなんか、あん時からもういたのか？

つか、俺確かに鍵かけたよな……？ それを考へると……美里、なんて恐ろしい子つ……！

「……ま、いいか。今に始まつたことじやねえし」

田覚まし時計を確認すると、後2時間は寝ても問題なさそうな時間だったので再び寝ようとした俺はあることに気づいた。

「なんか狭くね？ なんつーか、こいつ……反対側にも誰かが寝てやがるような……。」

右に顔を向けて、今度こそ俺は固まった。

「んつ……いけませんわ裕哉さん。そのような」と……ふひひ。すぐや……」

「なんつー夢見てやがる！－ つーか、なんでお前がこの家にいやがるつ！？」

美里はまだいい。家が隣同士だし、ひそし伝いに行き来出来るからな。だが、睦月。てめえは駄目だ！

「……ていつ」

背中を持ち上げてそのまま転がしてやると、漫画の一コマのようにな睦月の奴は転がつていつてそのままベッドから転落した。「ヨキツ」って音がした気がするが睦月のことだし多分大丈夫だろ。

「痛つ！ もう……一体何なんですか？」

ほりな。

「おはよっ、睦月。とりあえず、なんでここにいるのか聞かせてもうおつか」

寝起きとは思えないくらいの笑顔でいう俺。ただし、指をパキパキと鳴らしながら。

「あら、おはよー」ざこます裕哉さん。何でつて言われましても……きちんと玄関からお邪魔させていただきましたわ」

…きちんと玄関からお邪魔させていただきましたわ」

「ほう? 玄関ねえ……。鍵が掛かつてたはずなんだがなあ?」

「ふ……」わたしの七つ道具のひとつである『ひみんべ・ヒ

「對照。スルハニニニニナ故ジ一ゆうじ
一ゆる」とこゝものに掛ければ、鍵のひとつやふたつ

「はい？」

つてやつた。

THE JOURNAL OF CLIMATE

「...」

おお、よろしく無月遊三、ごめんなさい、今度は、ルナが

「なんでプロレスの実況風なんですかー!? ギブ！ ギブしますわ

「...」

卷之三

「後告知なんてひどすぎますわーーー！」

なんに」としてこねり、「よひやく美里の奴が田を覚ました
よつだ。

「ぬせよ、口か。……わつもの音せなー」と?

プロレスもじきじやなくて音のほつかよー。しかも「反応おもすき」

フ
！
！

「気にならん。もつ起きのなりたつて顔でも洗つてこ」

「んう……起きる。あれ？ なんで睦月ちゃんがここにいるの？」

「タダの不法侵入だ。後で逆を呪つこしてやるつと思つてゐるんだが、

美里もやるか？」

「え、……？」

「うん、やるー。家からバナナガード持つてくるねえ……」

黙囃だコイツ。まだ寝てやがる……早く起にしてやらうと。マジ

で家庚つてバナナガード持つてきかねん……。

美里は非常に寝起きが悪い。寝惚けてる時のコイツはなにするか分からんので早めに目を覚ましてやる必要があるのだ。

「いこからせつと顔洗つてこ」

「んにゅ……」

俺が指さすと美里はぬぼーっとした動きでドアを開けて階段を降りていった。

代わりに下から上がってきたお袋が顔を見せる。

「裕哉、さつきみせちやんが上から降りて　おや、睦月ちゃんも一緒にいたのかい？　一人とも相変わらずだねえ」

にやにや笑いのお袋。けつー、ババアがにやついてもキモいだけだつた……すみません、めつさ怖いんで特殊警棒取り出しながら殺氣を叩き付けないでくださいマジで。

「はい、濤恵小姐さま。」無沙汰しております

睦月の奴は既に復活していた。相変わらず見た目に反して頑丈な奴だ。

「どうだい？ 空月ちゃんも朝ごはん食べてくれかい？」

「やつしたいのは山々なのですけど……今日はこれから妹と遊ぶ約束がありますの。またの機会にお願い致しますわ」

陸月の妹か。いるのは知りてんだが会つたことどこのか名前すら知らないんだよなあ。陸月の奴はその辺のこと話したくなえみたいだしょ……。ま、急いで聞かなくてそのままのうち話してくれるだろ。

「やうかい？ それじゃあ仕方ないねえ。裕哉、アンタも仕度してやつねと下りてきな」

やつ言つてお袋は下に降りていった。

顔を見合わせる俺と陸月。さつきのプロレスもビキの続きをでもこいんだが、ここまひとつ聞いてみることにするか。

「なあ、陸月」

「はい、何です？ 裕哉さん」

「お前……結局なににきたの？」

「何つて……裕哉さんの隣で寝たかっただけですけど？」

マジでそれだけかよつ……。口イツんけど俺とか、どんなだけ距離があると謂つてんだ！？

「やうですかねえ。裕哉さんの『希望』といひませ、ベッドの上のプロレス」
「やうねえよ……」

第7話『THE 不法侵入』（後書き）

不法侵入は犯罪です。ダメ、絶対！

第8話『いつもより騒がしい朝飯』

「あれ？ 瞳月ちゃんは？」

「うつせえから逆さ吊りにして放置してきたわ」

「うわあ……本当にやつたんだ。コウツてば鬼畜……」

んな簡単に信じんなよ……。これが街中なら知らねえ場所に連れていかれてゾンビ？

「冗談だ。なんでも妹と遊ぶ約束があるらじくてな。さつき帰った

「そうなんだ。全然気がつかなかつたよ」

そりゃ奇遇だな、俺も気づかんかったわ……。戸を開ける音も聞こえなかつたし、アイツのご先祖様はNEVER何かか！？

あの後、瞳月の奴は薄くて黒い服（多分、寝間着代わりだ。といふか小ぶりな胸の膨らみが丸見えなくらい薄かつた）を脱いで、そこら辺に脱ぎ散らかしてあつた（見たまんまの意味だ。どうみてもお嬢様のすることではないだろ？）自分の服を着ると、音もなく玄関から出ていった。

「おや、瞳月ちゃんはもう帰つたのかい？」

お袋が台所から持つてきた膳をテーブルの上に置いていく。

はっ！ あまりの自然さにスルーしちまつとこだった！

「なんで金所にいたお袋が知つてやがる！？」

「ああ？ セツキ睦円ちゃんが玄関から出でていったじやないか。裕哉、アンタも氣配の一つや一つ読めないと、『』の先生きていけないよ？」

あの、母上？ 普通の人間は氣配なんてまず読めないと思つんですがね……。つか、氣配の一つや一つ読めないと生きていけない世界つてどんだけやべえんだよ……。

「あはは……」

ほら見ろ！ 美里の奴も苦笑いしてんぞ！？

「『』のナレーター面白いね！」

「テレビのほうかよ！？ しかもそこ苦笑いすると『』じゃねえだろつ！？」

「ん？ なにかおかしい？」

美里の奴は頭にハテナ浮かべて首をかしげてやがるし、お袋はお袋でしたり顔で笑つてやがるし… もつといや……と俺は牆に並べられた朝飯を見る。

今日は銀シャリに味噌汁に焼き鮭に漬け物か。む… NATTO Hがないだとつ！？

「お袋ー！ NATTO Hがないぞ！？」

「あ？ 誰かさんがよく食べるから納豆は今切れてんのよ。なんなら、代わりにNATTO弾を用意してやうつかい？」

「いえ、いりません…… いただきます」

ライフル弾なんか食えつか！！

「コウは本当に納豆好きだよねー。いただきまーす」

もぐもぐ……うむ、NATT OHには敵わないが焼き鮭もいい。
これぞまさしくジャパニーズ・ブレックファストって奴だな。

「ん？」
「そういや今日も親父がいないな。仕事なのか？」

「うんにゃ、今日は休み。父さんは朝早くから釣りに行つたよ。運がよければ今日の夜は魚だねえ」

「ああ、親父は釣りが趣味だつたな。一応期待しておきますか」

てな感じに朝飯を食つてると、いかにも「寝起きです」と言わんばかりに田をこすりながら二階から雪が降りてきた。

「ふあー…………おふあよーっ」

「おはよハ、雪立つたまお寝ねんじやなしよ。ほら、」飯出来て

お袋は途中を押されて湯面所に向かう雪
なんか三々四々しとる
ようだが……大丈夫か？

とそんな心配の必要はなかつたようで、面を洗つておひはりした雪が自分の席に座つて元気に挨拶してきた。

「おはよー裕兄さん、みさちやん」

「おはよう、雪。髪がボサボサのまんまとそ。穂の家に行く前に直してけよ?」

卷之三

「はい、朝ご飯お待ちどうさんだい？」
雪は蘿ちゃんの家に行くのかい？

「うん、お姉様が昨日の続きをしてくれるって……」

雪よ……何故そこで顔を赤くするー? やつぱは昨日俺が帰つてくる前は百合ひてたのかつー?

「かつかつかー やつぱは若いモンはいこねえー。食べられすぎないよつて気をつけなよ? 裕哉達は今日はどうするんだい?」「そうだなあ……」

「うーん、や遊ぶ約束はしてたが、なにをするかは全然決めてなかつたわ……。どうすつかなー。」

「うーん、今日は天氣もいいし、散歩しながら街まで出ようよ!」

ナイスアイディアだ、美里!

「おー、やうだな。てなわけで俺らは街で遊ぶわ。」うそせーん「うそせーんまでした。それじゃー僕は仕度しに一度家に戻るね。おばさん、朝ご飯ありがとでした!」「あいよ、お粗末様でした。またいつでもおこで!」「はーい、それじゃお邪魔しましたー!」

さて、俺も歯磨いて顔洗つて自分の部屋に戻りますかね と思つたら雪とお袋がこいつち見てニヤニヤ笑つてやがる。

「あんだけ?」

「いやー、みやぢやんつてホントいい子だと思つてねえ。裕哉、アンター8になつたらやつとみをけやんと結婚しちまーいな。あんないい子、他にいないよ?」

「け、結婚つて……あのな」

「駄目だよ、お母さん。みさちやんには睦月先輩や高橋先輩という強力なライバルがいるんだから。一筋縄ではいかないよー」

「ちょっと待てえ！ 睦月は分かるが俺と雅矢はそんな目で見られてるのかつ！？」

確かに奴の行動はちと行き過ぎな面もあるが、周りからそう思われてたとは……。

「けつ、言つてろ。俺は部屋戻るわ」

「はいはい。今日は一日中晴天らしいから、ゆっくり楽しんできな」

俺の背中では雪とお袋が、声は小さくだがまだ笑つてる。
なんとなく恥ずかしくなつた俺は、さつさと歯を磨いて面洗つて、
わざと音を立てて階段を駆け上がつて自分の部屋に戻つた。

第9話『春風のアリス』

「おっせえなアイツ……何のんびりしてやがんだ？」

美里から「10時過ぎに家の前で待つて」というメールをもらい、10時前から家の前で待ってるが、そろそろ10時を20分を過ぎようとしている。俺が大人か、「サツだあ？ ハツ！ 上等だコラア！」ってな感じにバリバリの不良だつたら足元に多数の吸殻が落ちてる頃だ。

ぶっちゃけ俺は性欲をもてあます……もとい、暇をもてあましていた。

右手でピースサインを作つて煙草を吸う真似をしてたら誰かが美里の家から出てきたが、美里と背が同じくらいで、見た目年齢十代後半か二十代前半の女性だ。とりあえず美里の奴じやねえことは確かだな。

「こんにちは、^{ゆう}裕ちゃん。煙草は18になつてからじやないと駄目よー？」

その人は俺の姿を見るや否や、小走りで掛けてきて「めつ」つて感じに人差し指を立ててきた。つーむ、テンプレ動作だけど可憐いよなあ、この人……。

「うひす、おばさん。いや、そこは嘘でも二十歳つて言つとくべきじゃないっすかねえ……」

「大丈夫よ。うちのお父さんも一八からやつてたし」

「さこですか……」

俺はそれだけ言つて、ため息をついた。

腰くらいまである、脱色したみたいにきれいな栗色の髪をヘアゴムで一つに纏めて、家事の途中なかつさき柄のエプロンを掛けているこの人の名前は神無月美恵子。苗字から分かるように美里の親だ。

絶対そうは見えないが、年齢は今年で三十九歳。ある田なんとなく聞いてみたら普通に教えてくれた。つまり、旦那さんと結婚して合体してすぐに美里が誕生したわけだ。おお、お盛んお盛ん。雪と同じくらいの天然属性持ちなので、たまに言葉のキャッチボールしてるはずが思いつきり後逸したり、大暴投で隣の家のガラスをやつちやつたりするような人。あくまでも比喩だが、本当にやりそうなのがこの人の恐ろしい所だ。

ちなみに田那さんは至つて普通の温厚なサラリーマンだが、今日は休日出勤でいらないらしい。まあ、こんな感じの母親と父親だから美里のような奴が生まれた……んだよな？

「男の子は黙つて待つてあげるくらいの余裕を持たないと駄目よ、裕ちゃん。みさちゃんならもうすぐ来ると思つわ

「そつすかあ。アイツは仕度長いからなあ……」

「そうねえ。じゃあー、次は裕ちゃんにも手伝つてもらおつかなー？　みさちゃんもきっと喜ぶわ！　あ、ほら　みさちゃん、仕度出来たみたいよ？」

恵美子さんに言われた俺が田を向けると、美里の奴がおずおずといつた感じに玄関から出てくるところだった。

「お待たせ、ユウ。ごめんね、遅くなっちゃって……」

「あ、そんなに待つちゃいねえよ。みわ……と？」

母親と同じように小走りで掛けてくる美里の全身を見て俺はそのまま固まった。

昨日のようなコスプレなんかじゃねえ、女の子の姿そのまんまの美里がそこにいた。

「うんうん、可愛いわみたちやん やっぱり私の見立てに狂いはなかつたわね。ほら、見て裕ちゃんっ！ 神無月アリスちゃんよー。可愛いでしょー」

「ど、どうかな、コウ……」

「あ、ああ……可愛いぞ。すいじく似合つてる」

俺は、薄く化粧もしているせいか、いつも以上に女に見える美里の姿を前にそれしか言えなかつた。

明るい栗色の髪は首よりも長いミディルロングを少し大きめの黄緑色のリボンで飾つて、春の芽吹きを思わせる薄い新緑色の太もも中丈のワンピースによく合つてる。まだ4月で肌寒いこともあってボレロ風の、レースで飾られた白いカーディガンを羽織つているがこれがまたいい。ソックスもワンポイントが入つた白のニーソで清楚さを際立たせてる。白い帽子があれば大人っぽいが、ないから子供っぽさを残した大人つて感じだ。

実際に春風の妖精がいたらきっとこんな姿をしてるんだろう。俺はボーッと美里の姿を見ながらそんなことを考えていた。

「本当？ よかつた……コウに氣に入られなかつたらビックリようかと思つてた……」

「ばつか！ そんな」と言つわけねえだろ？ マジで可愛いっての

……アリス

「あつ……」

さつと今の俺の顔は赤くなつてゐんだわ。照れ隠しに美里の頭をくしゃくしゃに撫でてやつた。

美里の顔も赤い。といつか、美恵子さんの前で何やつてんだ俺たち……。

「あ、それじゃ……いじりか

「お、おつ……そつだな」

「一人とも、いじりまじやい」

にじにじ顔の美恵子さんに見送られて、街に向かつて歩き始める俺たち。

……じで終われば問題ないんだが、この人の場合は確實に

「みやぢやーん！ お母さん、みやぢやんが朝帰りしてきてもちやんと暖かく迎えてあげるからね！ 昨夜はお楽しみでしたね、つて

「

ほらきた！

おい、そこの天然系人妻！ 笑顔で問題発言すなー！

「え、えええつ！？ あ、朝帰りつて……」

「子供は何人かしら？ 今から楽しみだわー ああ、幸生さん…

…子供達はこいつやって親元から巣立つてゆくものなのね……」

「…」

駄目だこの人妻。早く何とかしないと……。大体男同士でじりやつてガキつくんだよつ！ 仮に美里が性転換して女になつたとしても無理な話だぞ！？

「お母さん、ああなつたら2時間は戻つてこないから……ほつとい

て、いこいこ

「そりなのか……初めて見たわ」

美恵子さん、ある意味睦月のような人でもあるのか……。またひとつ新しい面が見れたな。

「ねえ、コウ。手つないでもいい？」

「ん……」

身長差が一〇〇ミリくらいがあるので上皿遣しに聞いてくる美里に、俺は黙つて左手を差し出す。

「あいつがとつ。やっぱりコウの手つて大きいね」

今のお前の手は穏やかな春の陽気みたいだな。暖かいよ。

思わず言ことになつたその言葉を寸前で飲み込む。自分でも不思議に思ひへり、自然に出てきそうで恥ずかしかった。

だから

「そりが？ これへりご普通だろ？ んで、まづはどこに行へんだ？」

どうでもいい言葉で、そのうち喉から勝手に飛び出しそうなその言葉に蓋をする。そして、いつもの調子の俺に戻るんだ。

「んー、少し公園によつてこいわよ」

そうだな、今までちよつとした花見を楽しむのも悪くねえ。
と、俺はそり思つていたんだが

「あそここの屋台のホットドッグ、久しぶりに食べたくなっちゃった
「ムードもへつたくれもねえなオイ！！」

「てへっ

やっぱり、神無月アリスになつても美里の奴は美里だつた！

第9話『春風のアリス』（後書き）

ようやく恋愛物っぽくなってきた感じですかね。
それでは次回、第10話『本日はデート日和也
の場合』 午前 お楽しみにー。

神無月アリス

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3069y/>

俺の周りは変と恋ばっか！

2011年11月20日04時03分発行